| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>「看護とはなにか」「看護師とはどのような職業か」について学び、看護を志す初学者としての基本的な考え方を身につける |
| 授業科目 | 看護学概論 | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 藤尾泰子<br>看護師臨床経験:10年以上<br>教育経験:10年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| | 5 | 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 看護とは | 自分が考える看護とは<br>看護とは　ナイチンゲール　看護覚え書き | 講義・演習 | 藤尾 | 基礎分野<br>心理学 |
| 2 | 看護覚え書き | 看護覚え書き構成ごとの学習 | 演習 | | 文化社会学 |
| 3 | 看護の主要概念 | 看護の定義<br>看護の主要概念:人間 | 講義・演習 | | 哲学 |
| 4 | 看護の主要概念 | 看護の主要概念:環境・健康・看護 | 講義・演習 | | 専門基礎分野 |
| 5 | 看護の役割・機能<br>看護の対象の理解 | 看護の役割と機能<br>看護の継続性と連携<br>看護の対象の理解 | 講義 | | 保健医療論<br>関係法規Ⅰ<br>関係法規Ⅱ |
| 6 | 看護の対象の理解 | 人間の「暮らし」の理解<br>健康のとらえ方と国民の健康状態 | 講義 | | 専門分野 |
| 7 | 看護理論 | 看護理論とは　看護理論の範囲<br>さまざまな看護理論 | 講義 | | 看護の思考過程<br>ヘルスアセスメント |
| 8 | 看護史 | 看護の変遷<br>職業としての看護 | 講義 | | 共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅱ |
| 9 | 看護職者 | 看護職者の資格、養成制度、就業状況<br>看護職者の継続教育とキャリア形成<br>看護の歴史 | 講義 | | 共通看護技術Ⅲ<br>経過に応じた基本技術Ⅰ<br>経過に応じた基本技術Ⅱ |
| 10 | 看護の提供のしくみ | サービスとしての看護<br>看護をめぐる制度と政策<br>法的な規定と就業状況 | 講義 | | 家族看護論<br>基礎統合演習<br>成人看護学概論 |
| 11 | 看護倫理 | 倫理とは　価値　道徳<br>職業倫理としての看護倫理<br>専門職に求められる倫理 | 講義 | | 老年看護学概論<br>小児看護学概論<br>母性看護学概論 |
| 12 | 生命倫理 | 生命倫理とは　生命倫理の原則<br>倫理的ジレンマ | 講義・演習 | | 精神看護学概論<br>在宅看護概論 |
| 13 | 医療安全 | 医療事故・医療過誤<br>ヒューマンエラーと防止<br>看護業務の特性と医療事故<br>インシデント・アクシデント・ヒヤリハット<br>事故防止 | 講義・演習 | | 看護管理・看護倫理<br>看護の統合と実践 |
| 14 | 国際看護・災害看護 | 国際化と看護　異文化理解<br>災害時における看護 | 講義 | | |
| 15 | 国際看護・災害看護 | 災害時における看護 | 講義(45分) | | |
| 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験(45分) | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験(10割)<br>但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学[1]　看護学概論　医学書院<br>国民衛生の動向　厚生労働統計協会<br>看護のための人間発達学　第5版　医学書院<br>看護覚え書　本当の看護とそうでない看護　日本看護協会出版会 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>看護技術の概念について理解し、看護技術の基本となるコミュニケーション技術を身につける<br>また、感染予防のための知識・技術とともに、対象の意思決定や主体的な参画を支援する学習支援について学ぶ |
| 授業科目 | 共通看護技術Ⅰ | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 足立　唯<br>看護師臨床経験:7年以上<br>教育経験:3年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 看護実践のための技術 | 1. 看護技術とは<br>① 技術とは　② 看護技術の特徴<br>③ 看護技術の範囲　④ 看護技術を適切に実施するための要素<br>⑤ 看護技術の発展と習得のために | 講義 | 足立　唯 | 基礎分野<br>心理学<br>人間工学<br>教育学<br>人間関係論演習 |
| 2 | 療養生活の環境 | 2. 療養生活の環境<br>①療養生活の環境<br>②病室の環境のアセスメントと調整<br>安全な療養環境の整備の技術<br>①転倒・転落・外傷予防<br>・白衣着用時の身だしなみについて | 講義 | | 専門分野<br>看護学概論<br>共通看護技術Ⅱ<br>共通看護技術Ⅲ<br>経過に応じた基本技術Ⅰ<br>経過に応じた基本技術Ⅱ |
| 3 | 標準予防策<br>(スタンダードプリコーション)1 | 感染防止の基礎知識<br>標準予防策<br>①スタンダードプリコーションに基づく手洗いの技術 | 講義<br>演習 | | 看護の思考過程<br>家族看護論<br>成人看護学概論 |
| 4 | 環境調整技術1 | ②ベッドメーキング | 演習 | | 老年援助論Ⅱ |
| 5 | 環境調整技術2 | ③臥床患者のリネン交換の技術 | 演習 | | 精神看護学概論<br>精神援助論Ⅲ |
| 6 | 苦痛の緩和・安楽確保の技術 | 罨法<br>⑤体温調整の技術(罨法) | 講義<br>演習 | | 医療安全<br>専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ |
| 7 | 看護者としての関係構築のための<br>コミュニケーション | 2. 関係構築のためのコミュニケーション<br>① コミュニケーションとは<br>② コミュニケーションの構成要素<br>③ ミスコミュニケーションについて<br>④ 医療におけるコミュニケーションの特徴<br>⑤ 接近的行動とその実際 | 講義 | | 看護形態機能学Ⅱ<br>看護形態機能学Ⅲ<br>臨床微生物学 |
| 8 | 対象との関わりを効果的にする<br>コミュニケーション1 | 3. 効果的なコミュニケーション<br>① マイクロカウンセリング技法:傾聴<br>② 情報収集の技術<br>③ アサーティブネス<br>④ プロセスレコードとその振り返り | 講義 | | |
| 9 | 対象との関わりを効果的にする<br>コミュニケーション2<br>多職種連携のための<br>コミュニケーション | 4. ベッドサイドでのコミュニケーション<br>5. コミュニケーション障害への対応<br>6. 効果的なカンファレンスのあり方<br>① カンファレンスとは | 講義 | | |
| 10 | 感染経路別予防策<br>洗浄・消毒・滅菌 | 洗浄・消毒・滅菌　感染性廃棄物の取り扱い<br>カテーテル関連血流感染対策 | 講義 | | |
| 11 | 標準予防策<br>(スタンダードプリコーション)2 | 必要な防護用具の選択、着脱の技術<br>使用した器具の感染防止の取り扱いの技術<br>②個人防護用具装着<br>(手袋、エプロン、ガウン、ゴーグル)<br>③感染性廃棄物の取り扱い、無菌操作の技術 | 講義 | | |
| 12 | 無菌操作の技術 | ①滅菌物の取り扱い　②無菌操作<br>③使用した器具の取り扱い<br>④個人防護用具装着<br>(手袋、エプロン、ガウン、ゴーグル)<br>①滅菌物の取り扱い　②無菌操作 | 講義<br>演習 | | |
| 13 | 看護における学習支援 | 学習支援とは<br>学習支援の実際(家庭／学校／職場／地域)<br>健康状態に応じた学習支援の実際<br>(外来／入院時／退院時／個人／家族／集団) | 講義 | | |
| 14 | 学習支援ワーク1 | 事例に応じた学習支援のロールプレイイング | グループワーク<br>ロールプレイイング | | |
| 15 | 学習支援ワーク2 | 事例に応じた学習支援のロールプレイイング | 45分<br>グループワーク<br>ロールプレイイング | | |
| 16 | 終講試験 | | 試験(45分) | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験:終講試8割、学習状況(課題・演習など2割)<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔2〕 基礎看護技術Ⅰ　医学書院<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔3〕 基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版　学研<br>ナイチンゲール看護覚え書　現代社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために、活動と休息・睡眠の援助、安楽確保の技術、清潔および衣生活援助技術について学ぶ |
| 授業科目 | 共通看護技術Ⅱ | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 池上　真由美<br>看護師臨床経験:5年以上<br>教育経験:5年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 活動・休息の援助技術<br>基本的活動の援助<br>移動の援助、睡眠・休息の援助 | 基本的活動の援助<br>基本的活動の基礎知識、体位<br>移動(体位変換・歩行・移乗・移送)<br>睡眠・休息の援助 | 講義 | 池上　真由美 | 基礎分野<br>心理学<br>人間工学<br>教育学 |
| 2 | 活動・休息の援助技術<br>睡眠・休息の援助<br>苦痛の緩和・安楽確保の技術<br>ポジショニング、罨法 | 活動・休息の援助技術<br>睡眠・休息の援助<br>苦痛の緩和・安楽確保の技術<br>身体ケアを通じてもたらされる安楽<br>①体位の保持の技術(ポジショニング)<br>②褥瘡予防ケアの技術<br>③安楽な体位の調整の技術<br>④安楽の促進・苦痛の緩和のためのケア | 講義 | | 専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ<br>看護形態機能学Ⅱ<br>看護形態機能学Ⅲ |
| 3 | 体位変換、ポジショニング演習 | 車椅子・ストレッチャーの移乗介助・移送の技術<br>体位変換、ポジショニングの技術 | 演習 | | |
| 4 | 移乗・移送演習 | 車椅子・ストレッチャーの移乗・移送、杖歩行の介助 | 演習 | | |
| 5 | 病床での衣生活の援助 | 援助の基礎知識<br>衣服を用いることの意義<br>熱産生と熱放散<br>被覆気候<br>衣生活に関するニーズのアセスメント<br>病衣の選び方<br>病衣・寝衣の交換 | 講義 | | 専門分野<br>看護学概論<br>共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅲ<br>経過に応じた基本技術Ⅰ<br>経過に応じた基本技術Ⅱ |
| 6 | 寝衣交換演習 | 寝衣交換の技術・整容の技術 | 演習 | | 看護の思考過程<br>家族看護論 |
| 7 | 清潔の援助の基礎知識<br>清潔の援助の実際 | 清潔の援助の基礎知識<br>皮膚・粘膜の構造と機能<br>清潔援助の効果<br>患者の状態に応じた援助の決定と留意点<br>入浴、シャワー浴、全身清拭 | 講義 | | 成人看護学概論<br>医療安全 |
| 8 9 | 全身清拭演習 | 全身清拭演習 | 演習<br>演習(45分) | | |
| 10 | 清潔の援助の実際<br>洗髪・口腔ケア | 洗髪とは・口腔ケアとは | 講義 | | |
| 11 | 清潔の援助の実際<br>部分浴、陰部洗浄 | 部分浴(足浴・手浴)・陰部洗浄とは | 講義 | | |
| 12 | 洗髪演習 | 洗髪の技術・整容の技術 | 演習 | | |
| 13 | 口腔ケア講義・演習 | 口腔ケアとは　口腔ケアの技術 | 講義・演習 | | |
| 14 | 足浴演習 | 部分浴の技術<br>足浴 | 演習 | | |
| 15 | 陰部洗浄演習 | 陰部洗浄の技術 | 演習 | | |
| 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験(45分) | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験(7割)　レポート(3割)<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔2〕　基礎看護技術Ⅰ　医学書院<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔3〕　基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版　学研 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために、食事援助技術、排泄の援助技術について学ぶ |
| 授業科目 | 共通看護技術Ⅲ | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 山田　緑<br>看護師臨床経験:10年以上<br>教育経験:1年以上<br>大西　恵梨<br>看護師臨床経験:10年以上<br>教育経験:1年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | |
|---|---|
| 教育目標 | 2　さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3　人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| | 4　生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 食事援助の基礎知識 | 食事の意義<br>食事に必要なメカニズム | 講義 | 山田　緑 | 基礎分野<br>人間工学<br>教育学 |
| 2 | 栄養の評価 | 栄養状態および食欲、摂食能力のアセスメント | 講義 | 山田　緑 | 文化社会学 |
| 3 | 食事の援助 | 食事介助の基礎知識、実際<br>摂食嚥下訓練の基礎知識、実際 | 講義 | 山田　緑 | 専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ |
| 4 | 食事の援助 | 食事指導・食事介助の技術 | 演習 | 山田　緑 | 看護形態機能学Ⅱ<br>看護形態機能学Ⅲ |
| 5 | 非経口的栄養摂取 | 非経口的栄養摂取の援助<br>経管栄養法<br>中心静脈栄養法 | 講義 | 山田　緑 | |
| 6 | 非経口的栄養摂取 | 経管栄養法<br>経管栄養法による流動食の注入の技術<br>経鼻胃チューブの挿入の技術 | 演習 | 山田　緑 | 専門分野<br>看護学概論<br>共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅱ |
| 7 | 排泄の援助の基礎知識 | 排泄援助に対する基礎知識<br>排泄の意義とメカニズム<br>排泄の観察とアセスメント | 講義 | 大西　恵梨 | 看護の思考過程<br>成人看護学概論<br>老年援助論Ⅱ |
| 8 | 排泄援助方法 | トイレ・ポータブルトイレでの排泄援助方法<br>床上排泄の援助方法 | 講義 | 大西　恵梨 | 医療安全 |
| 9 | 排泄機能障害がある対象への援助① | おむつによる排泄援助 | 講義・演習 | 大西　恵梨 | |
| 10 | 自然な排泄を促す援助の実際 | 床上排泄援助の実際<br>排泄援助(床上、ポータブルトイレ、おむつなど)の技術 | 演習 | 大西　恵梨 | |
| 11 | 排泄機能障害がある対象への援助② | 導尿・摘便による排泄援助 | 講義 | 大西　恵梨 | |
| 12 | 持続的導尿の実際 | 膀胱留置カテーテルの挿入の技術<br>膀胱留置カテーテルの管理の技術 | 演習 | 大西　恵梨 | |
| 13 | 排泄機能障害がある対象への援助③ | 浣腸・ストーマケアによる排泄援助 | 講義 | 大西　恵梨 | |
| 14 | 浣腸の実際 | グリセリン浣腸の技術 | 演習 | 大西　恵梨 | |
| 15 | まとめ | これまでの講義内容のまとめ | 講義(45分) | 大西　恵梨 | |
| 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験(45分) | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験(7割)　レポート(3割)<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔2〕　基礎看護技術Ⅰ　医学書院<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔3〕　基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版　学研 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>対象の状況を把握するためのヘルスアセスメントを学ぶ |
| 授業科目 | ヘルスアセスメント | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 池上　真由美<br>看護師臨床経験:5年以上<br>教育経験:5年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | 人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として捉え、環境との相互関係の中で、変化しながら生活する存在として理解できる能力を養う |
| | 3 | 人々の健康上の課題に応じて、科学的根拠に基づいた看護を展開できる基礎的能力を養う |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ヘルスアセスメント<br>観察・記録・報告 | ヘルスアセスメントとは<br>ヘルスアセスメントの意義、目的<br>ヘルスアセスメントに必要な技術<br>ヘルスアセスメントの実際<br>全体を概観する・健康歴の聴取<br>フィジカルアセスメント、フィジカルイグザミネーション<br>観察・記録・報告の意味 | 講義 | 池上　真由美 | 基礎分野<br>人間工学<br><br>専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ<br>看護形態機能学Ⅱ<br>看護形態機能学Ⅲ |
| 2 | バイタルサインについて | バイタルサインとは<br>バイタルサインを測定する意義・目的<br>バイタルサインの変動因子<br>バイタルサイン測定の実際<br>（血圧、脈拍、呼吸、体温、意識） | 講義 | | 病態生理学総論<br>病態と治療Ⅰ<br>病態と治療Ⅱ<br>病態と治療Ⅲ<br>病態と治療Ⅳ |
| 3 | 身体計測 | 身体的状態のアセスメント<br>身体計測<br>身体のみかた:視診・触診・打診・聴診・問診 | 講義・演習 | | 専門分野<br>看護学概論<br>共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅱ |
| 4 | 呼吸器のフィジカルアセスメント | 呼吸器系のフィジカルアセスメントとフィジカルイグザミネーション | 講義・演習 | | 共通看護技術Ⅲ<br>経過に応じた看護技術Ⅰ |
| 5 6 | バイタルサイン測定演習 | 血圧測定 | 演習<br>演習（45分） | | 経過に応じた看護技術Ⅱ<br>看護の思考過程<br>基礎統合演習 |
| 7 | バイタルサイン測定演習 | 体温、脈拍数、呼吸数、血圧測定 | 演習 | | 成人援助論Ⅰ<br>成人援助論Ⅱ |
| 8 | バイタルサイン技術チェック | バイタルサイン測定 | 技術チェック | | 成人援助論Ⅲ<br>成人援助論Ⅳ |
| 9 | 循環器のフィジカルアセスメント | 循環器系のフィジカルアセスメントとフィジカルイグザミネーション | 講義・演習 | | 成人援助論Ⅴ<br>老年援助論Ⅰ |
| 10 | 腹部のフィジカルアセスメント<br>乳房・生殖器のフィジカルアセスメント | 腹部のフィジカルアセスメントとフィジカルイグザミネーション<br>乳房・生殖器のフィジカルアセスメントとフィジカルイグザミネーション | 講義・演習 | | 老年援助論Ⅱ<br>老年援助論Ⅲ<br>医療安全 |
| 11 | 骨格筋系のフィジカルアセスメント | 骨格筋系のフィジカルアセスメントとフィジカルイグザミネーション<br>ROM　MMT | 講義・演習 | | 看護の統合と実践 |
| 12 | 頭部・頸部・感覚器系の<br>フィジカルアセスメント | 頭部・頸部・感覚器系のフィジカルアセスメントとフィジカルイグザミネーション | 講義 | | |
| 13 | 心理・社会のアセスメント | 事例を用いた心理・社会のアセスメント | 講義 | | |
| 14 | 症状のアセスメント | 事例を用いた身体面のアセスメント | 講義 | | |
| 15 | 症状のアセスメント | ・基本情報　・経過表<br>・情報収集　・援助計画の立案<br>・個別性のあるバイタルサイン測定、フィジカルアセスメント | 演習 | | |
| 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験（45分） | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験（7割）　実技点（1割）　レポート（2割）<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔2〕　基礎看護技術Ⅰ　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版　学研<br>フィジカルアセスメントガイドブック　医学書院 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br><br>看護実践するための看護過程の展開技術を身につける |
| 授業科目 | 看護の思考過程 | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 小林　理絵<br>看護師臨床経験:10年以上<br>教育経験:10年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| | 4 | 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 看護過程の展開とは | 看護とは　健康とは<br>看護理論とは<br>現象を説明するための枠組み<br>看護過程とは<br>看護を具体的に実践するための方法論 | 講義<br>GW | 小林　理絵 | 基礎分野<br>心理学<br>文化社会学 |
| 2 | 基盤となる考え方 | 問題解決思考 | 講義 | | |
| 3 | | クリティカルシンキング<br>倫理的配慮と価値判断<br>リフレクション<br>臨床判断モデル | GW | | 専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ<br>看護形態機能学Ⅱ |
| 4 | 具体的な方法<br>情報整理とアセスメントの視点 | アセスメントするための情報収集<br>事例の対象を理解するために必要な情報とは | 講義<br>GW | | 看護形態機能学Ⅲ<br>病態生理学総論<br>病態と治療Ⅰ |
| 5 | 身体面のアセスメント | | 講義<br>GW | | 病態と治療Ⅱ<br>病態と治療Ⅲ |
| 6 | 情報収集の枠組み | 情報整理　枠組みの考え方<br>ゴードンの機能的健康パターンに沿った情報収集 | 講義<br>GW | | 病態と治療Ⅳ<br>病態と治療Ⅴ |
| 7 | 情報収取の方法 | カルテからの情報収集について | 講義<br>GW | | |
| 8 | 情報のアセスメント | 1．健康知覚・健康管理パターンのアセスメント | 講義<br>GW | | 専門分野<br>看護学概論 |
| 9 | 情報のアセスメント | 各パターンについてのアセスメント | 講義<br>GW | | 共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅱ |
| 10 | 情報のアセスメント | 気になる情報とは<br>情報から問題を見出す | 講義<br>GW | | 共通看護技術Ⅲ<br>基礎統合演習<br>成人援助論Ⅰ |
| 11 | 情報のアセスメント | 「栄養-代謝」「排泄」「活動-運動」「睡眠-休息」<br>のアセスメント | 講義<br>GW | | 成人援助論Ⅱ<br>成人援助論Ⅲ<br>成人援助論Ⅳ |
| 12 | 情報のアセスメント | シミュレーション演習<br>ベッドサイドでの情報収集 | 演習 | | 成人援助論Ⅴ<br>老年援助論Ⅲ<br>小児援助論Ⅲ |
| 14 | 援助計画の立案 | 対象に必要な援助を考える | 講義<br>GW | | 母性援助論Ⅲ<br>精神援助論Ⅲ<br>訪問看護の看護過程 |
| 15 | 援助計画の立案 | 対象に必要な援助を考える | 講義（45分） | | 看護の統合と実践 |
| 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験（45分） | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験（7割）　学習状況（課題・演習など3割）<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学[2]　基礎看護技術Ⅰ　医学書院<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学[3]　基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>系統看護学講座　別巻　臨床薬理学　医学書院<br>看護技術プラクティス第4版　学研 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために、創傷管理技術、呼吸・循環を整える援助技術、死の看取りの援助について学ぶ |
| 授業科目 | 経過に応じた基本技術Ⅰ | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 堀之内　泉<br>看護師臨床経験：10年以上<br>教育経験：4年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| | 4 | 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |
| | 5 | 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる |

| | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学習内容 | 1 | 創傷管理技術 | 創傷管理の基礎知識<br>（創傷処置／ドレッシング材管理／包帯法） | 講義 | 堀之内　泉 | 基礎分野 |
| | 2 | 創傷管理技術 | 褥瘡予防の基礎知識<br>（褥瘡発生要因／判定スケール／褥瘡予防ケア） | | | 専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ |
| | 3 | 創傷管理技術 | 創傷処置（ガーゼの当て方・テープの剥離・貼付法）と包帯法 | 演習 | | 看護形態機能学Ⅱ<br>看護形態機能学Ⅲ<br>疾病治療論 |
| | 4 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 酸素吸入療法／酸素ボンベの取扱い<br>排痰ケアの基礎知識と実際<br>（体位ドレナージ／スクイージング／咳嗽介助　ハフィング）<br>吸入療法の基礎知識と援助の実際 | 講義 | | 病態と治療Ⅰ<br>病態と治療Ⅱ<br>病態と治療Ⅲ<br>病態と治療Ⅳ<br>病態と治療Ⅴ |
| | 5 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 吸入の技術<br>酸素吸入療法の実施（酸素ボンベの取り扱い）<br>ネブライザーを用いた気道内加湿 | 演習 | | 病態と治療Ⅵ<br>専門分野 |
| | 6 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 口腔・鼻腔内吸引 | 講義 | | 看護学概論<br>共通看護技術Ⅰ |
| | 7 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 吸引の技術　口腔内・鼻腔内吸引 | 演習 | | 共通看護技術Ⅱ<br>共通看護技術Ⅲ |
| | 8 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 持続吸引（胸腔ドレナージ）<br>人工呼吸療法 | 講義 | | 成人援助論Ⅰ<br>成人援助論Ⅱ<br>成人援助論Ⅲ |
| | 9 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 体温管理の技術<br>末梢循環促進ケア | 講義 | | 成人援助論Ⅳ<br>成人援助論Ⅴ<br>老年援助論Ⅱ |
| | 10 | 診察・検査・処置における技術 | 診察の介助<br>検査・処置の介助<br>X線撮影・コンピューター断層撮影：磁気共鳴画像<br>内視鏡検査・超音波検査・肺機能検査<br>核医学検査・穿刺 | 講義 | | 老年援助論Ⅲ<br>医療安全<br>看護の統合と実践 |
| | 11 | 症状・生体機能管理技術 | 症状・生体機能管理技術の基礎知識<br>検体検査<br>尿検査・便検査・喀痰検査 | 講義 | | |
| | 12 | 症状・生体機能管理技術 | 生体情報のモニタリング<br>心電図検査<br>心電図モニター | 講義 | | |
| | 13 | 症状・生体機能管理技術 | $SpO^2$モニター<br>血管留置カテーテルモニター | 講義 | | |
| | 14 | 死の看取りの援助 | 死にゆく人と周囲の人々へのケア<br>死後の処置の在り方<br>死後の処置 | 講義 | | |
| | 15 | まとめ | 講師によるまとめ | 講義45分 | | |
| | 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験45分 | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験（8割）　レポート（2割）<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔3〕　基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版 |

| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>2年次 | 科目のねらい |
|---|---|---|---|
| 授業科目 | 経過に応じた基本技術Ⅱ | 1単位 | 看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるためにの診察・検査・処置における技術を学ぶ |
| 担当講師 | 足立　唯<br>看護師臨床経験:7年以上<br>教育経験:3年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| 教育目標 | |
|---|---|
| 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| 4 | 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |
| 5 | 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる |
| 7 | 看護師としての生き方を模索し、キャリア形成の礎を築くための教養を身につけることができる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 薬物療法について | 与薬の基礎知識<br>薬物療法の意義と看護師の役割<br>薬物療法の意義と目的<br>薬に関連した法令<br>薬物の種類<br>薬物の種類吸収・分布・代謝・排泄<br>薬理作用とその影響、副作用 | 講義 | 足立　唯 | 基礎分野<br>専門基礎分野<br>看護形態機能学Ⅰ<br>看護形態機能学Ⅱ<br>看護形態機能学Ⅲ<br>疾病治療論<br>病態と治療Ⅰ<br>病態と治療Ⅱ<br>病態と治療Ⅲ<br>病態と治療Ⅳ<br>病態と治療Ⅴ<br>病態と治療Ⅵ<br>臨床薬理学<br>専門分野<br>看護学概論<br>共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅱ<br>共通看護技術Ⅲ<br>成人援助論Ⅰ<br>成人援助論Ⅱ<br>成人援助論Ⅲ<br>成人援助論Ⅳ<br>成人援助論Ⅴ<br>老年援助論Ⅱ<br>老年援助論Ⅲ<br>医療安全<br>看護の統合と実践 |
| 2 | 与薬法について1 | 経皮的与薬法(経口薬(バッカル錠・舌下錠・内服薬)<br>吸入法、単純塗擦法、点眼・点鼻・点耳法、 | 講義 | | |
| 3 | 与薬法について2 | 経路別与薬方法と実際<br>経口与薬法,口腔内与薬法、直著内与薬法 | 講義 | | |
| 4 | 与薬法について3 | 薬物療法の技術<br>(経口与薬・経皮与薬・麻薬の管理) | 演習 | | |
| 5 | 注射法について1 | 注射法とは:適応、メリット・デメリット、吸収速度の違い<br>注射の種類と目的・方法、合併症:皮内注射、皮下注射 | 講義 | | |
| 6 | 注射法について2 | 筋肉内注射、静脈内注射、輸液療法 | 講義 | | |
| 7、8 | 注射法の実際 | 注射法の技術の実施<br>(筋肉注射、皮下注射) | 演習<br>45分演習 | | |
| 9 | 検体検査<br>(静脈血採血、動脈血採血、血糖測定) | 静脈内採血の目的<br>静脈内採血時の医師の役割<br>採血時に起こりうる事故と回避方法<br>静脈内採血の実際<br>検体の取り扱い<br>検査の介助 | 講義 | | |
| 10 | 静脈血採血の実際 | 静脈血採血の技術演習 | 演習 | | |
| 11 | 輸液管理 | 輸液療法の実際(プライミング)<br>点滴静脈内注射の管理 | | | |
| 12 | 輸液管理・輸血管理 | 輸液療法を受けている対象の看護<br>看護師の役割と法的役割<br>輸血法と輸血の管理<br>針刺し事故後の防止・事故後の対応<br>インシデント・アクシデント発生時の速やかな報告 | 講義 | | |
| 13 | 静脈内注射、輸血の実際 | 静脈内注射、輸血の実施 | 演習 | | |
| 14 | 診察・検査・処置における技術1 | 診察の介助<br>検査・処置の介助<br>X線撮影・コンピューター断層撮影:磁気共鳴画像<br>内視鏡検査・超音波検査・肺機能検査、核医学検査 | 講義 | | |
| 15 | 診察・検査・処置における技術2 | 穿刺 | 講義 | | |
| 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験(45分) | | |

| 評価方法 | 筆記試験(8割)　レポート(2割)<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
|---|---|
| テキスト | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学〔3〕　基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版　学研 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>2年次 | 科目のねらい<br><br>急性期医療、慢性期医療、エンドオブライフケア、遺族ケアなどさまざまな領域で家族看護のニーズの重要性が増している。家族全体を視野に入れた看護の必要性について学ぶ。 |
| 授業科目 | 家族看護論 | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 河合　真紀子<br>看護師臨床経験:<br>教員経験:10年以上 | 時間数<br>15時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| | 4 | 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 家族看護とは | 家族看護の成立と発展過程<br>家族看護の目的 | 講義 | 河合　真紀子 | 基礎分野<br>心理学<br>文化社会学 |
| 2 | 家族看護の対象理解① | 家族とは<br>社会の発展と家族の変貌<br>家族の形態の変化 | 講義 | | 専門基礎分野 |
| 3 | 家族看護を支える理論① | 家族の誕生と消滅<br>家族の発達段階と課題 | 講義 | | 専門分野Ⅰ<br>看護学概論 |
| 4 | 家族看護を支える理論② | 家族役割と生活　家族役割理論<br>育児と介護　家族構造と機能<br>病気がもたらす生活の変化　家族ストレス理論 | 講義 | | 看護研究<br>看護の思考過程<br>ヘルスアセスメント<br>共通看護技術Ⅰ |
| 5 | 家族看護過程 | 家族アセスメントと介入理論<br>家族システムズアプローチ | 講義 | | 共通看護技術Ⅱ<br>共通看護技術Ⅲ<br>基礎統合演習<br>経過に応じた基本技術Ⅰ |
| 6 | 家族看護の実践① | 事例に基づく家族看護実践 | 講義 | | 経過に応じた基本技術Ⅱ |
| 7 | 家族看護の実践② | 高齢者と家族<br>医療的ケア児を育ている家族 | 演習 | | 地域・在宅看護論<br>訪問看護と看取り<br>地域と看護<br>成人看護学概論<br>精神援助論Ⅲ<br>老年看護学概論<br>小児看護学概論<br>母性看護学概論<br>精神看護学概論<br>看護の統合と実践 |
| 8 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 筆記試験(7割)　レポート(3割)<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　別巻　家族看護学　医学書院 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野Ⅰ<br>基礎看護学 | 時期<br>1年次 | 科目のねらい<br>看護の思考過程およびヘルスアセスメント、共通看護技術Ⅰ～Ⅲ、経過に応じた基本技術Ⅰ・Ⅱで修得した看護基本技術を統合させ、患者の状態に応じた看護ができる能力を身につける<br>また、記録・報告の技術を身につける |
| 授業科目 | 基礎統合演習 | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 小林　理絵<br>看護師臨床経験：10年以上<br>教育経験：10年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 3 | 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる |
| | 4 | 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |
| | 6 | 看護実践を振り返り新しい知見を得て、人々の健康と豊かな生活に寄与することができる |

| | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学習内容 | 1 | 全体像の把握 | ・関連図作成　問題の関連性を考える | 講義 | 小林　理絵 | 基礎分野 |
| | 2 | | ・3側面を踏まえた全体像の把握 | | | 人間関係論演習 |
| | 3 | 看護問題の明確化 | 看護の思考過程で使用した事例をもとに看護問題を検討する<br>・看護問題の見極め<br>・看護問題の種類・表記方法・優先順位<br>・原因・誘因について | | | 専門分野 |
| | 4 | 看護計画の立案 | ・期待される効果の明確化 | | | |
| | 5 | | ・対象の個別性<br>・クリティカルパス | | | |
| | 6 | 援助の実施① | ・計画の実施<br>・安全・安楽・自立を考えた援助 | | | 専門分野<br>看護学概論 |
| | 7 | 実施評価・修正① | ・実施と記録<br>・評価を行う時期・評価の進め方 | | | 共通看護技術Ⅰ<br>共通看護技術Ⅱ<br>共通看護技術Ⅲ |
| | 8 | 援助の実施② | ・計画の実施<br>・安全・安楽・自立を考えた援助 | | | ヘルスアセスメント<br>看護の思考過程<br>経過に応じた看護技術Ⅰ |
| | 9 | 実施評価・修正② | ・実施と記録<br>・評価を行う時期・評価の進め方 | | | 経過に応じた看護技術Ⅱ<br>訪問看護の看護過程<br>成人援助論Ⅰ |
| | 10 | 援助の実施・評価・修正③ | ・計画の実施<br>・安全・安楽・自立を考えた援助<br>・実施と記録 | | | 成人援助論Ⅱ<br>成人援助論Ⅲ<br>成人援助論Ⅳ<br>成人援助論Ⅴ |
| | 11、12 | シミュレーション演習 | | 演習 | | 老年援助論Ⅲ<br>小児援助論Ⅲ<br>母性援助論Ⅲ |
| | 13 | シミュレーション演習振り返り | | 講義 | | 精神援助論Ⅲ<br>看護の統合と実践 |
| | 14 | 看護記録とは | 看護記録の法的位置づけ　看護記録の規定<br>記載規準<br>看護記録の構成 | 講義 | | |
| | 15 | 看護要約とは | 基本情報　看護計画　経過記録　看護サマリー | 講義（45分） | | |
| | 16 | 終講試験 | 筆記試験 | 試験（45分） | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 終講試験（　割）　学習状況（課題・演習など　割）<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| | 系統看護学講座　専門分野　基礎看護学[2]　基礎看護技術Ⅰ　医学書院<br>系統看護学講座　専門分野　基礎看護学[3]　基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>系統看護学講座　別巻　臨床薬理学　医学書院<br>看護技術プラクティス　第4版　学研 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育内容 | 専門分野<br>基礎看護学 | 時期<br>2年次 | 科目のねらい<br>看護研究に必要な基礎的知識を身につけ、研究に取り組むことができる |
| 授業科目 | 看護研究 | 単位<br>1単位 | |
| 担当講師 | 冨澤　理恵<br>臨床経験:3年以上<br>教育経験:10年以上 | 時間数<br>30時間 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教育目標 | 4 | 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる |
| | 2 | さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる |
| | 7 | 看護師としての生き方を模索し、キャリア形成の礎を築くための教養を身につけることができる |

学習内容

| 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 担当講師 | 関連科目 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 始めよう－看護研究<br>看護研究とは | 研究プロトコール、研究デザイン<br>研究の倫理 | 講義 | 冨澤　理恵 | 基礎分野<br>論理学Ⅰ |
| 2 | 研究のプロセス | *記事に関する考察 | 講義 | | 論理学Ⅱ<br>情報科学 |
| 3 | 様々な研究と研究計画 | 看護研究の紹介<br>質的研究、量的研究 | 講義 | | 情報倫理 |
| 4 | 研究テーマを考える<br>ケーススタディⅠ | 文献検索、論文抄読<br>クリティーク | 講義 | | |
| 5 | ケーススタディⅡ | 研究進行の発表 | 講義 | | 専門基礎分野 |
| 6 | 研究倫理 | 文献レヴューの発表 | 講義 | | |
| 7 | 文献検索 | ケーススタディについて<br>事例研究論文の抄読、クリティーク<br>ケーススタディ骨組み作成方法 | 講義 | | 専門分野<br>看護学概論<br>成人看護学概論 |
| 8<br>～<br>13 | 【看護学科教員担当】<br>ケーススタディーを始めよう<br>ケーススタディ作成 | 回復期実習（10月）で受け持った対象の<br>ケーススタディを講義をもとに行う<br>・ケーススタディをレポートにまとめる<br>ケーススタディの構成<br>■テーマ<br>■はじめに<br>■研究場所・研究期間<br>■患者情報<br>■看護の実際<br>■考察<br>■結果<br>■参考文献・引用文献<br>担当教員と報連相しながらケーススタディを進める | 演習 | 小林　理絵 | 成人援助論Ⅰ<br>成人援助論Ⅱ<br>成人援助論Ⅲ<br>成人援助論Ⅳ<br>成人援助論Ⅴ<br>老年看護学概論<br>老年援助論Ⅰ<br>老年援助論Ⅱ<br>老年援助論Ⅲ<br>医療安全 |
| 14.15 | ケーススタディ発表 | レポートをもとに3枚のパワーポイントを作成して<br>発表する | 発表 | | |

| | |
|---|---|
| 評価方法 | 試験:2割　ケーススタディ:8割<br>但し、受験資格は履修規定、第10条によるものとする |
| テキスト | 系統看護学講座　別巻　看護研究　　医学書院 |